
病みつき語

勅b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつき語

【Nコード】

N8833Z

【作者名】

勲b

【あらすじ】

病みつき連載番外編！

短編にしてはストーリーがなく、連載にするには短すぎる話をただただ書いてきます。

暇潰しにでもなれば嬉しいです

基本はオリ主×ヒロインです

原作キャラ×ヒロインの場合は前書きに書いときます

常にキャラのリクエスト募集中

思いついたら更新するので、不定期更新です

作品によっては鬱ENDもあります

『様々な 形合わせた 物語』

F a t e 凜 1 (前書き)

話を思いついたら更新します

P S オリ主 x 凜です

F a t e 凜 1

その日、少年は化物に襲われた。

そんな少年を彼女

遠坂凜は助け、自室に招いた。

「……なあ、遠坂」

少年と遠坂はクラスメイトだ。

普段は淑やかなクラスメイトだが、今の彼女は少し違う雰囲気だ。

「ごめんなさい」

遠坂は1人困惑している少年に頭を下げる。

少年はそれを見て慌てて言う。

「な、なんで遠坂が謝るんだよ！ 遠坂は化物から救ってくれた俺の命の恩人なんだ、助けてくれてありがとう」

少年は遠坂に頭を下げる。

だが、それを見ても遠坂は申し訳なさそうに言う。

「私がきちんとあなたのことを監視してたらこんなことにはならなかったのに……」

監視……？

少年がその意味を聞く前に遠坂は疑問の言葉をあげる。

「あなたは彼女に見覚えはあるの？」

少年は首を縦に振る。

「イリヤちゃんはこの間会ったことがあるよ」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

少年を襲った化物の傍にいた少女だ。

「彼女にはもう近づかないで……近付けさせないけど」

最後は少年に聞こえないぐらい小声で言う遠坂。

「もう大丈夫だから、あなたは私が守るわ」

遠坂は優しく少年に語り掛ける。

「さつきみたいな怖い思いはもうさせない」

遠坂が右手の平を少年に向ける。

「だって、あなたはこの部屋から一步も出させないもの」

「何を」

少年が言い切る前に、後ろにあった鎖が動き出し、少年の首を捕

える。

「えっ

」

そのまま鎖に引っ張られると壁にぶつかり、両手両足が縛られる。

「驚かないで、私があなたを守るためにこれは必要なことなの」

遠坂は少年にゆつくりと近付きながら優しく言う。

「これで、あなたは私の傍から離れられないから。あなたはここで私の帰りを待ってるだけでいいの。安心して、私があなたを見捨てることはないから。私が何時までもあなたの面倒を見てあげるから。

だから、安心して

安心して私の傍にいなさい。

永遠にね」

そう言って怯える少年の頭を遠坂は優しく撫でる。

逃げ出さないと

少年はその思い出一杯で、鎖を外そうと試みるが外れることなかった。

「あなたのことは私が責任を持って面倒みるからね。私はあなたのためなら何だってやってみせるわ」

恍惚な表情で少年を見る遠坂。

そんな2人がいる部屋にノックと同時に扉が開かれる。

「凜 何をやってるんだ」

彼 アーチャーは遠坂と少年を見ながら疑問の言葉を口にする。

「彼を守るために彼をこの部屋に置いとくわ」

「安心を確保したいのであれば教会に預けた方がいいのでは？」

「そんなことをしたら私が彼に会えないじゃない」

遠坂は少年を見ながらアーチャーに応える。

少年はアーチャーを見て目線で助けてくれと訴える。

アーチャーはその意図をわかったのか、遠坂に知らせる。

「凜、衛宮士朗が尋ねてきたのだが……」

「帰ってもらって」

即答で応える遠坂の目には、怯える少年しか映っていない。

「今は、彼を見ていたいの」

遠坂は怯える少年を優しく撫でながら言う。

それを見たアーチャーは自身のマスターである遠坂の言う通りに

動き出す。

「それでは、衛宮士郎には事情を説明して帰ってもらおう」

「そうして」

「待つ

」

少年が言い切るより早くアーチャーは部屋から出ていった。

「アーチャーに何を言おうとしたの？」

遠坂は少年に問いかける。

「い、いや、何でも……ない」

「そうよね。」

あなたがアーチャーに言うことなんかないしね。

あなたが話し掛けるのは私だけで充分なもの。

そうそう、この部屋にはアーチャーにも入るなって言っとくから。

これで、あなたは私以外の人を見なくてもすむわよ。

だって、あなたは私以外の人を見る必要が無いもの」

そう優しく言う遠坂に少年はただただ怯える。

愛しいモノを見るような目付きで少年を見る遠坂

俯きながら、ただただ怯えるだけの少年

そんな2人の夜は終わらない

F a t e 凜 1（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

セイバーオルタの口調と性格を頑張っと思って思い出してます（笑）

アーチャーの口調ってこんな感じでしたよね

PS感想やキャラのリクエストくれたら嬉しいです！！

F a t e 凜 2（前書き）

この小説にはストーリーがありません。

原作ブレイク
キャラ崩壊

といった要素が含まれています。

そのため、ストーリーに関する質問をされても答えられませんのであしからず。

P S 凜 1の続きです

F a t e 凜 2

「苦しそうね」

遠坂は鎖に繋がれた少年の顔を見ながら言う。

「あなたの苦しそうな顔も私は好きよ」

恐怖で怯えている少年を無視して話を進める遠坂。

そんな彼女の部屋の扉が勢い良く開く。

「遠坂何をやってるんだ!!」

「凜、早急に彼を解放しなさい!」

「衛宮! セイバー!」

少年が突然の乱入者の名前を呼ぶ。

一方、遠坂は邪魔者に舌打ちをし、睨む。

「何をやってるの、アーチャー!」

遠坂が呼ぶと衛宮達の跡を追うようにアーチャーが優雅に歩いてくる。

「なに、君に言ったとおり事情を説明したら血相を変えてこの部屋に駆け付けたのさ」

「凜、あなたが私の彼を監禁するとは……」

セイバーは遠坂の傍にいる少年を見る。

「遠坂……何でこんなこと」

「彼の安全を確認するためよ。

それに、私の傍にいた方が彼も幸せだわ」

遠坂は少年を優しく見つめる。

「安全の確保だったら教会に預ければいいじゃないか！」

「それはダメです」

衛宮の発言に遠坂ではなくセイバーが異議を唱える。

「彼は安全は私が確保します。

いざとなれば、シロウと彼は私が守ります」

セイバーは遠坂を睨む。

「ですので、早く彼を解放してください」

「いやよ、これは私と彼だけの問題なんだから」

遠坂はそう言つと少年の頬を優しく撫でる。

「彼に触れるな……！」

「アーチャー！」

セイバーが遠坂に向かって距離を詰めようとすると、2人の間にアーチャーが入る。

「邪魔をするな、アーチャー！」

「こんな凜でも、私のマスターでね、私には守る義務があるのだよ」

「アーチャー」

遠坂は自身の令呪をアーチャーに見せつける。

「ッ！ 遠坂、まさか！？」

「早まるな、凜！」

「私と彼の邪魔をする2人を殺しなさい！！」

遠坂が言つと自身の令呪が1つ減る。

「遠坂……セイバー、ここでは危険だ、一旦外に出よう」

「ですが、それでは彼が」

「セイバー……衛宮……！」

少年は2人にか細い声で言う。

「助けて」

「ッッッ！？」」

それを聞き、遠坂、セイバー、衛宮の3人が反応する。

「待つてろよ、今俺達が助けてやる！」

「辛いのは今だけです。

直ぐに私が貴方を助けますから。

そして、貴方を守ります！」

「アーチャー、2人とは外で戦って」

「凜……？」

アーチャーは遠坂を横目で見える。

が、遠坂は少年の顔しか見てなく、その意図は掴めない。

「……いいだろう」

そう言うアーチャーはセイバーと衛宮を外に誘い込む。

セイバーは衛宮の言うことをしぶしぶ聞き、舞台を外に移した。

これにより、部屋にはまた少年と遠坂が残された。

「なんで」

遠坂は少年の首に絡まっている鎖を手取る。

「なんで、私以外の奴に助けを求めたの？」

「グッ!？」

遠坂は鎖を強く締める。

それにより、少年の首も締まる。

「そんなに私の傍にいるのは嫌だった？」

そんなに私と居たくないの？

そんなに私のこと嫌いななの？

なんで？

ねえ、なんで？

こたえなさいよ!!」

首を締められ、喋ることすらままならない少年に遠坂は続けて言う。

「私はこんなにも君のこと思ってるのよ？」

なのに、君は私のこと嫌うの？

意味がわからない！

なんで!!

私が君に嫌われるようなことをした!!？」

少年は朦朧とする意識の中、遠坂の話を聞く。

聞きたくないと思っても、手足を縛られているため聞くしかない。

「……いない」

少年の首が更に強く締まる。

「私のことを嫌う君なんて」

少年は

「いない」

その言葉を最後に意識を手放した。

F a t e 凜 2（後書き）

後日談というか、反省会

後日談じゃないか、俺は死んじゃったし。

あつ、どーも、主人公です。

名無しです。

今回は……

謎だらけな終わり方だね。

セイバーとイリヤは何で俺と知り合ってたのかな？

まあ、単純にセイバーとイリヤのヤンデレを書きたかったから作者が出したただけだね。

出番無かったね。

P S キャラのリクエスト募集中

F a t e 以外でも全然 O K ! !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8833z/>

病みつき語

2011年12月29日23時52分発行